
Endless Dystopia Online

ナノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Endless Dystopia Online

【Nコード】

N1332BA

【作者名】

ナノ

【あらすじ】

VRMMO『Endless Dystopia Online』。軍事技術を応用して造られたVRゲーム、その最新のMMO作である。特にそんなことなどどうでもよく過ごしていた俺は、大好きなマイシスターからのお誘いを受けてそのオープンβテストに参加することとなった。何故か親友の青葉も共に。……キャラ設定で思いつきデータをバグらせてしまったが大丈夫だろうか。しかもこのゲームはログアウト不可のデスゲームで、俺達はゲームから出られなくなってしまった。そうして始まったデスゲームの中で、

俺は妹を助けるために昏睡状態に陥って――。

0 - 1 : 現実と仮想へのプロローグ【?】（前書き）

V R M M O モノですが六話までは現実編です。

因みに主人公が胸焼けしそうなぐらいのシスコン具合です。ノリで
やっちゃいました。

駄文ですが、どうぞお楽しみください。

0 - 1 : 現実と仮想へのプロローグ【？】

仮想体感^{VR}多人数同時参加型オンラインゲームというものは聞いたことがあるだろうか。

現実と変わらず五感を殆どそのまま共有し、仮想の世界で仮想のアバターを動かして世界中のプレイヤー達と協力、対決、共存する新感覚の体感型ゲームの一種である。

^{ヴァーチャルリアリティ}VRは元々アメリカが軍事目的に開発したある技術を応用して生み出され、初期は何の変哲もないコミュニケーション系のゲームとして登場していた。続いてオフラインのVR RPGやFPS等が発売され、今回ついにVR技術がMMOとして開発されたのである。

……まあ、全部今さっき知ったばかりの付け焼き刃の知識だけど。

俺はそこまで沢山のゲームはやっていない。義妹に誘われて一度MMOをやったことはあるが、自分でやることはあまりなかった。蛇足だけど、そのMMOでも変な通り名付けられて凹^{へこ}んだ。

そんな俺が何故こんなにも熱^{まか}くゲームについて話をしているかと言つと……話は30分程前に遡^{さかのぼ}る……。

俺の名前は佐々木零都^{ササキレイト}。人は俺のことをこう呼ぶ、『厄介事』と……。

『厄介事の種』ではない、『厄介事』である。なにこの扱い……

泣ける。

神に恨まれてるとしか思えない。俺はこんなにも普通だというのに。

まあ俺のことはどうでもいいや。もう諦めてるし。

次は……^{マイシスター}My sisterことマイエンジェル、俺の義妹、^サ佐々木鈴音だ！ 愛称はスズ。世間的に一言で表すのなら……『自立したヒッキー』って感じたな。

……とりあえず、今笑った奴と馬鹿にした奴は地獄に落ちろ。スズを^{けな}貶す輩は全員潰す。

え？ シスコンだって？ そんなに褒めないでくれよアハハハハハハハハ

……コホン。さて、気を取り直して……。まあマイシスターはさつき言った通り所謂^{いわゆる}引き籠もり、ヒッキーというものだ。だがそれだけではない。ネット上のあらゆる情報をどこからともなく手に入れ、自宅に居ながらもPCを用いて毎度色々やって稼いでいるらしいのだ。なにしてるか知らないけど。

……まあ、家から全然出ないから食料は俺が確保して上げてるんだけどね。一応バイトもしてるし。

と、まあ……そんな可愛い可愛い我が義妹がある休日の昼食時、俺にこんなことを言ってきたのだ。

無口なスズが自分からしゃべるのは珍しいので俺は嬉々として耳を貸したわけだが、

「当たった」と、一言。

——うん、いつも通り可愛いな。

……まあ言葉が足りないのはいつものことだ。気にするな。

「……ふむ」

当たった……ね。なんだろ、宝くじ？

因みにここで「なにが」とか聞き返してはいけない。禁句だ。

確かスズは最近VRゲームの方に興味を持ち始めていたよな。うん、仮想でも運動してくれるのは兄として嬉しい限りだ。

で、そんなスズのいきなりの「当たった」という一言。……VRか……確か青葉の野郎が『VRゲームがついにMMOに出た！』とか言ってたから……んー……。

「VRMMOのβテストにでも当選したか？」

「そう」

よし、パーフェクト。俺がスズの言いたいことを解読出来ないことがあるものか！

どうやら話を聞く限りでは、あるMMOの大会で三位以内に入賞した特典によりチケットを貰えたらしい。このMMOもVRMMOを開発した会社のゲームだったんだろうな。

「ペアチケット」

「んー？ 二人分ってことか？」

「うん」

……そうか。二人分か……そうかそうか。

「一人じゃ、行けない」

「つまり俺に、一緒に行けと？」

「（こくっ）」

頷いた。可愛いな……ってそうじゃなくて。

とりあえず今の光景を脳内フォルダ7746番に削除不能にして

保存した後、俺は事の重大さをよく考えてみる。

テスターになる。

←

そのために出掛ける。

←

スズを外に連れ出せる……！？

つまり……スズは自分からそんなことに誘ってくれたということか！？

最高じゃないか！ 行こう！ すぐ行こう！ 早く行こう！！

「いつだっ！？」

「兄さんの、夏休み初日から」

タイミングも最高だ！ ありがとう神様！ さっき俺を恨んでるだなんて疑ってゴメン！ スズの次に愛してる！

……というようなことが30分前にあった。

というわけで今現在。俺は一人部屋でVRMMOについての情報を片っ端から集めまくっているのである。全てはスズの笑顔のために！

……少しテンション上げすぎたか。……え、自重？ するわけないじゃんww

さて、そうして情報を手に入れるために頑張ってるわけだが……
うん、何かかなり凄いつばい。

今回参加するVRMMOオープンβテストのゲームタイトル『E
ndless Dystopia Online』らしい。
エンドレス デイストピア オンライン

このゲームのモンスターの一部には一般人のアイデア等も取り入れてあり、様々な種類の相手がいるとか。

確か、常に進化し続けるためのシステムの人格化……その他、一部のNPCやモンスターに人工知能、つまりは『AI』を搭載したとか。

システム管理用『AI』には様々な権限もあり、システムの隅々をしつかり管理しているとか。

『創造システム』によりプレイヤーはどんな武器や防具等でも創り出すことが出来、『AI』の管理により新しい武器達の熟練度やスキルも追加するシステムがあるとか。

スキルは『AI』からいくつも生み出され、個人に発現する特殊な能力や、規定のクエストからしか入手出来ない特殊スキルがあるとかないとか。

……うん。とにかく凄い、ということさえ覚えておけばいいだろう。

チケットにペアチケットがある理由は、恐らく知り合いが居た方が気楽だろうと運営が考えた配慮だろう。粹なことしてくれるじゃないか。Goodだよ！

まあ、スズに俺以外の知り合いはいないし、一人じゃ外で動けないだろうからな。……うん、本当に感謝してるよ。

さて……夏休みっていつからだっただかな。……ん？ 二週間後？
なんて微妙な……。

……とりあえず、俺はスズとのβテストのために色々と下調べをしておかないとな。どこでやるのか、とか……どうやって行くのか、とか。

あと、スズに変な虫が付かないように気をつけないと。まあ、手

を出して来る奴が居た場合……問答無用で殺っちゃうけど。

そんなこんなで二週間。いや、あつと言う間だったなあ。

なんか青葉の奴も高校で『βテスト俺も当たった』とか言ってたけど、知るかそんなこと。俺は正直スズのこと以外は基本どうでもいいと思ってるからな。

さて、そして現在の時間は午前8時45分。バスでβテストを行うホールに行くため、9時少し前に家を出発する必要がある。期間は一ヶ月。ふむ、意外と長いけど、スズのためなら幾らでも夏休みを潰してやるさあ！ 勿論、高校に通う日もな！

出発準備は勿論二人共終わっている。俺がスズを待たせるわけがないだろう。それにスズもこの日を楽しみにしてたんだから。

………ただ、問題が一つあるんだよなあ………。

「……なあスズ。その格好で行くつもりなのか？」

「……これしかない」

はあ、まあ、そうだけどさ……。スズは外に出ないから外出用の服は持っていないし、持つてると言えばスズが今着てる俺が以前上げた服しか無いけど……。これ、今のスズには小さいしな。他の野郎共の目に留まるような姿なのはいただけない。

「……しかたないな」

そう呟いて部屋に戻り、服を入れてあるタンスからなるべく大きな半袖の上着を一枚取り出して、スズの待つ玄関へと戻る。

「とりあえずこれ着とけ。気休めくらいにはなるだろ」

俺とスズでは身長が大きく違う。少なくとも20cmは。

まあつまり、この上着を着ておけば体の2/3程を楽に隠せるわけだ。まあ黒の男物だけど、そこはしかたがない。第一、スズは最低限しか服装を気にすることはないからな。俺としてはもっとオシヤレをして欲しいものだが。

「……うん」

と、スズは小さくそう返事をして俺が差し出した黒い上着を受け取った。その仕草を脳内削除不能フォルダ7746番に保存している間も、スズはそれに袖を通していく。元々着ていた藍色の服とスカートが黒の上着で殆ど隠されて少し残念に思ったが、顔には出さない。

「んじゃ、行くか」

「（こくっ）」

俺とスズ、二人分の荷物を持って俺は玄関の扉を開け外に出る。

続いて出てきたスズは最近暑さの増してきた日差しの眩しさを受けてしまい、目を細めた。

——このクソ太陽が！！　なにやってくれたんだ殺すぞ！……
じゃなくて、事前においた日傘を傘立てから取り出してスズの方へ向き直る。

……日差しがスズの姿をよく照らし、その儚さをより強く浮きただせている。病弱と言っても過言ではない、というより病弱なほぼ

真つ白な肌。色の全く落ちていない真つ黒なストレートの長髪。若干痩せ気味で150cm程しかない16歳にしては小さな体（胸は言うまでもないだろうけど、Aだ。何故知ってるか？ 逆に言うが、スズについて知らないことなど俺には殆ど無いZ E？）。極みに全く幼さの抜けていない童顔と大きな瞳。

……そんな、学校の奴等とは違う少し異常な姿に苦笑……なぞするわけもなく、微笑みながらこの時のために買っておいた日傘をスズに受け渡す。因みに傘が重いと言われた場合は俺が持つて上げるつもり。又は予備として用意している帽子を渡す。終いにはおぶつても良い。

——過保護？ シスコン？ ハッ、黙れクズ共。スズに仇なす者共は一人残らず俺が消し尽くす！ たとえそれが作者^{あんたら}×読者だとしてもなあ！！

「ありがと、にいに……」

ほら、見る！ この可愛さ！ この愛らしさ！ この素直さ！ この無邪気さ！ そこの愚か者共なんて比べ者にならない程に最高の美しさだろう！

俺はスズのためなら何でもやってみせる！ たとえ空を飛べなると言われたとしてもなあ！

I Love my sister!! マイシスタースズは俺の天使^{エンジェル}なのだ！！

……さて、それはそうとしてそろそろ家を出ないとね。

「行ってきます……っと、スズ」

「……行ってきます……？」

——うん、最高。

0 - 1 : 現実と仮想へのプロローグ【?】（後書き）

現実編は一話3500〜4000文字程度。他編はわかりません。
変えるかもしれないし、そのままかも。

【??? / ????

HN : ??? LV ???

SEX : 男性

AGE : 16

RACE : ???

Class : ???

Availability : ???

Skill : ???

Equipment : ???

Money : ???G

0 - 2 : 現実と仮想へのプロローグ【？】

そんなこんなでやって来ましたが、近所のバス停。とりあえず近くにいた青年Aを完璧無視しつつ、スズと共に近くのベンチに座る。
パーフェクトスルー
そしてそのままバスが来るのを待とうとしていると青年Aがスズの隣に座ろうとしてやがったので、思い切り蹴りつけて背後の壁に頭から埋め込ませてやる。後悔しながら死ぬがいい！

「ひ……酷いな……零都」

「あ”あ”ん？ 黙れクス。てめえに名乗る名なんざ無^ねえんだよ。
消え失せる青年Aが」

「いや、俺は青葉鷹人^{アオバタカヒト}だつて！ ついこの前会ったばかりだろお前……」

「知らねえよ！ スズに手え出す野郎共は全員皆殺したクス男！
覚えとけ！！」

「……………すさまじきシスコン魂だな相変わらず」

とか言いながら青年Aがフラフラになりながらも立ち上がる。ちっ、しとめ損ねてたかつ！

「黙れよ、そんなに褒めんな。というわけで後五発くらいくらつとけ」

「おまつ！？ ちよつ！？ 待て待て！！ わかった！ 謝るから！ この通り！」

この通り、という言葉と共に目の前のクス男こと青年Aがフライング土下座などという超高難度技を繰り出してきた。――はて、この技をここら辺りで使えるのって確か俺の知る限りでは一人しかいなかった気が……って。

「……なにやってんだ、青葉」

「おま………もういいや、諦めよう」

そう言つと青年A改め青葉鷹人は立ち上がり、俺の隣に座つてくる。フツ、良い判断だ。スズの隣に座りやがってたらスクラップに
してやってたな。

「んで、それ……その子がお前の溺愛してるって言う義妹さんか？」

この野郎、スズを一瞬だが物扱いしやがって……まあいい。次は
無いがな。

「そうそう。お前ら野郎共が幾ら集まったところで届きはしない程
の可愛さを誇るマイ天使だ」
エンジェル

「……そんなことない」

顔を赤くしつつ俺だけに聞こえるように小さくそんなことを言い
放つスズの姿を脳内に刻み込みつつ、話を続ける。

「まあ、適当な自己紹介をしてやると……この失礼なクズ野郎は青
葉鷹人。とりあえずフル（Fool。意味は馬鹿、愚か者、アホ
など）とでも呼んでくれれば「オイッ」いい。訂正は一切無い「し
てくれよ……」」

「……にいがお世話に。フル」

「乗るの!？」

「……乗る」

……んー。しかたない、解釈してやるか。

「つまり『なんて呼べばいいのかわからない。だからにいが言っ
た呼び名で呼ぶことにする』ってことだ。な、スズ？」

「（こくっ）」

「おま……す、凄いな……」

「ハッ、この程度普通にわかるだろフル」

「フル、フル」

「何か馬鹿にされてる……。はぁ、なるほど……さすが究極のシス
コン」

「どういたしまして」

と、笑顔で返してから次の説明に移ろうとすると、青葉がこんな
ことを言い出した。

「とりあえず、俺のことは青葉でいいぞ」

……アイコンタアークト……！

いいかいスズ。絶対に、絶対に呼んではいけないよ？

「……（こくっ）」

小さく、本当に小さくこちらを向いて頷いた。後で頭撫でてあげ
ないと。

「……嫌」

「ええ……？」

「クク、馬鹿め。スズは俺の妹だぞ？ 義理のだが」

「……わかったよ……もういいです、はい」

何か呆れたようにそう言い放ったので勝ち誇った気持ちでスズの
頭を撫でていると、青葉は話の続きを促し始めた。まだ話あったの

か。

「で、そちらの義妹さんの名前は何なんだ？　まだ俺しか言ってないだろ」

……そういやそうだったな。

「……しかたないな。こちらの天使は俺の義妹佐々木鈴音。見ての通り体が弱いんだから、無神経なことをしたり手を出した日には俺がその身を死よりも恐ろしい J I G O K U に突き落としてやるから覚悟しとけよ？」

「あ……ああ……わかった……（死神も殺せそうな剣幕だな……）」

……？　なんだこいつ、そんなにビビってからに。特に何もする気はせんというのに………たぶん。

「……バス、来た」

つと、そろそろ紹介も終わりか……。

バスの中では誰もが羨む窓際を勿論スズに譲り、俺はその隣に腰掛ける。スズは騒がし過ぎるのが嫌いなので周りが会話をしている俺は無言で居ることにした。話しかけてきたクソ青葉はとりあえずバスの床に埋めておいた。

そんなこんなで殆ど会話などせず、目的地である某県某市某ホー
ルに着く頃には、気付けば既に正午を過ぎていた。

スズを待たせてしまっていたので土下座する勢いで謝ったのだが、
何故か必死で俺を許し宥めてくれた。我が天使はなんと優しいこ
とか。

……と、いうわけで現在俺達はホール内のそれぞれの部屋（青葉
は一人用に当選したらしい。方法は普通に手紙での応募みたいだ。
なので俺とスズは一緒の二人部屋、青葉は二人部屋）に荷物を置い
ていき、食堂の一つの長机の端の方へ三人で座った。片側の端に俺、
隣にスズが座り、反対側の端に青葉のみが座る。

生憎と周りは随分と空いていた。初日は食堂で昼食を頼めないら
しいのでここにいるのは殆どが弁当組だ。他は外のファミレスにで
も行っているのだろう。

俺は自分の弁当とスズの弁当（両方俺が作った。スズの嫌いなも
のを一切入れずに栄養バランスもGOODな完璧仕様。スズは肉類
や油類が嫌いだから少し変則的な中身だ）を部屋から持ってきたバ
ッグから取り出し机の上に置く。青葉もコンビ二で買ってきたであ
ろう適当な弁当を手を持ち、机上へ置いた。

「そつえば「黙れっ！」ぐあ!？」

もうホント気を使うことを知らない青葉を殴り飛ばし、一息吐く。
何か爽快だわ、コレ。

「な……に、するんだよ……」

「スズは周りから注目されたりすることが苦手なんだ。人が沢山い
る時の会話はスズにとってはタブーに近いものなんだよ。バス内で
しゃべらなかつた理由その2も実はそれに当たる。……お前はホン
トに気を使うことを知らないな……」

「いや……実際に言ってもらわんとわからんだろ……」

「なにを言うか。スズの表情を読み取ればわかるだろうに」

「……無表情にしか見えないんだが」

「どこがだっ！！ どう見ても『早くお弁当が食べたい』って顔してるじゃないかっ！！」

「っ……！」

俺がそう青葉^{バカ}に言い放つと同時に、スズが驚きながらも頬を赤く染めて俺の服の裾を掴む。ヤバイ可愛すぎるっ！ 『もうやめて、恥ずかしい』ですねわかります！

「というわけで黙れ。もうしゃべるな。食事中にしゃべるのはマナー違反だ」

「あ……ああ、わかった」

義妹のこととなると本当にこいつ性格変わるんだなー……と、この時青葉^{バカ}は実感したのだった。

そうして昼が過ぎ、多少の時間を部屋で過ごして現在15時ジャスト。

その時間、このホール（他県にも同じようにβテスト用のホールが幾つか用意されているらしい）の人々はまるで決められていたかのように入り口の近くに集まり、騒ぎ出す。というか決められていた。この時間に俺達βテスターは集められ、身体の変量解析を受けなければならないのだ。

多変量解析というのは幾つもの計測の結果から答えを割り出す極めて正確な測定方法であり、聞いた話では今回の多変量解析は所謂レントゲンのようなものらしい。その身体データが個々人のキャラクターデータの”基”となり、仮想現実での自分の体となる。当初は現実の体をそのまま使用することに不満を唱える者はかなり多かつたらしいが、次第に鎮静化した。

鎮静化した主な理由を上げるとするなら、

1 . 男性と女性の体では骨格からして仕組みが違ってきているので脳に負担が掛かり過ぎる。

2 . たとえ同姓キャラにしたとしても、そのデータが現実の体と遠く離れていれば脳の認識にズレが起こる。多少ならば平気だが、本来の体よりも動きやすくなることは絶対に無い。

3 . これが主に大半を締める理由だが——VR機器『ヘッドプラント』は多変量解析の結果データを個人の認識元として登録するため、パスワードも無く必ず他者にデータをいじられなくなる仕様となっている。そのため解析データとの違い、つまりエラーが複数表示された場合は『ヘッドプラント』を起動することが出来ないのだ。要するに、取ったデータと本体が合ってなきゃ起動不可。

って、感じだな。……うん、これだけ言われりやしかないだろ。本人との体が違う過ぎれば『ダイブ（VRゲーム起動用語）』出来ないんだから。

さて……そういうわけで俺とスズと青葉^{バカ}は広場へとやって来たわけだが……ふむ、まず一言。……うるせえぞてめえら!! スズも頭痛そうにしてんだろが! 少しは静かにすることを覚えやがれっ!!

………よしわかった。とりあえずお前らVR^{あっち}世界で全員ぶっ殺す。Killしまくる。いいよね? いいよな? よし決定!!
……さて、と。フフフ。なあ読者達よ。俺がこんな耳を抑えてる

スズをそのままにして置くと思うか？ 思わないよな？ 何か準備してると思うよな？ その通りっ！！

俺はバッグから『こんなこともあるのかと』と準備しておいたヘッドホン型耳栓を取り出し、スズの頭に被せてあげる。色は青！うん合う！ 可愛い！

「……あり、がと」

「どーいたしました」

さて……なあ、運営共……これ以上スズを待たせるつもりなら俺は貴様等を殺しにい「お待たせしました」ちっ！！

「つと、やつとか」

青葉^{バカ}も遅いと思ってたよな？ よし合格！！ 青葉に『バカ』とルビ振るのはもうやめてやる。

「長らくお待たせしました。ただ今よりVRMMO『^{エンドレ}ss Dystopia Online』のオープンβテストにより使用して頂くキャラクターデータのための多変量解析を行いたいと思います」

はいはい。長つたらしい説明はいいからとつと終わらせましようね。あ、スズのヘッドホン取ってねえ……まあいいか、後で俺が説明すれば。

「ではまず一番先頭の方からこちらの小部屋に……」

……俺ら最後辺りだし、時間掛かりそうだな……。

0 - 2 : 現実と仮想へのプロローグ【?】（後書き）

【??? / ???

HN : ??? LV ???

SEX : 男性

AGE : 16

RACE : ???

Class : ???

Avility : ???

Skill : ???

Equipment : ???

Money : ???G

0 - 3 : 現実と仮想へのプロローグ【？】

「では次の……」

「俺だな」

と、青葉が受付の方へ歩き出す。その背中からは「やつとか……」という言葉が出そうな雰囲気は漂ってはいるが、スズ至上主義な俺としては劳いの言葉すら掛ける気は起きない。第一、俺とスズも待っているのだから（途中でスズが倒れそうだったから無理矢理背負った。恥ずかしがってはいたが、スズは体が弱いのでこればかりは譲れなかった）文句しか出てこないのが現状だ。もう40分は経っているのだから。

そんな状況。俺達は受付側から生暖かいジトツとした視線を受け続けていた。

「……いに、もう、大丈夫。……降ろして」

「嫌だ」

所謂おんぶ等という行為によりスズを背にしながら聞こえてきた声にそう返すと、受付の人も苦笑したように視線を外していた。スズは視線を向けられていたことに気付いてなかったみたいだけど。

「……」

「無理」

「……まだ、なにも言っていない」

「スズの考えてることはおみ通しだよ。『本当に大丈夫だから』、だろ？」

その言葉にスズは息を飲み、ため息を吐きながら無言で肯定を示

す。いつもこんな感じなのでわざわざ驚いたりしてくれることは無かった。

「私にはにの心、わからないのに……にいに、ズルい」

「フツ、愛のなせる技さっ！」

とかカッコつけて言ってみたり。事実だけど。

「……………」

……黙ってしまった。どうしたんだろう……。

えっと、えーっと……と、とりあえずスズがなに考えてるか読み取らないと。スズに元気が無いのはダメ、ゼッタイ。

「……………」

「……………」

「……………ッ！」

……なに……い！？ まさか……スズの心が……わ、わからない……だと……っ！？

「ク……クク……ハハハ……スズ、ごめんな……こんな駄目な兄で」

「え……？」

「いや……なんでもない、なんでもないよスズ……」

……負けた……。俺の……俺のスズへの愛は、この程度だったということなのか……。

スズを励まして上げたいのにその原因はわからない。いつでもスズのためになることを考えて動かないといけないのに……兄失格だ。

「いに……なにがあつたか、わからないけど……元気、出して」
「スズ……」

ああ……我が天使^{エンジェル}は何とお優しいことか、こんな駄目な兄にそんなことを言ってくれるなんて……俺は……俺は……く、スズ、一生付いていきますっ！……ま、スズが結婚するまで、だけどね……。相手がいるかないかは別として、結婚^{そこし}がかなり心配だ。スズには幸せになつてもらいたいのに……。

……え？ 俺？ ハハツ、さすがにそれはないだろ。俺とスズは義理とはいえ兄妹だぜ？ それに俺もスズのことを恋愛の相手として見てるわけでもないし、スズもそうだと思う。……もしそうじゃないとしたら……いや、それは考えなくてもいいか。

とにかく、俺はスズが大好きだ。スズも俺を無口ながらも好いてくれている。……つまりこれは……歴^{れっき}とした、兄妹愛だっ！！

クク……ああっ！ 兄妹愛っ！！ なんと素晴らしい言葉かつ！ なんと素ん晴らしい言葉なのだろうかっ！！（大事なことで二回言いました）

「よし、調子戻ってきた！ ありがとうスズ！ もうホントマジで愛してるっ！ いつでも俺を頼ってくれよっ！」
「っ！？」

スズがかなり顔を赤くして口をわなわなと動かし始めた。……が、その心を読むこともなく、俺は受付の方へ向き直る。
なぜなら、

「では次のお二人、こちらにお越しく下さい」

青葉の多変量解析が終わり、俺達の順番が回ってきたからだ。

「行くか、スズ」

「う……うん……」

……まだ照れてるのかぁ……可愛いなあ。

とまあ、そんなこんなで多変量解析も終わり、扉を開けて部屋から二人で外に出る。

……え？ そんなこんなでなんだった？ えー、まあ、そんなに面白くも無かったからカットしたんだけど……簡略化するなら、まあレントゲンみたいなもの……ってコレさっきも言ったよな。言う必要無かったか。

今日は17時〜22時までの間がダイブ可能時間らしい。初日なので時間は短いだろう。まあ、スズが不服そうだったらすぐに運営をボッコボコにしてくるけど。

そのまま部屋へと戻ろうと思っていたのだが、通路の壁に寄り掛かっていた青年Aを見つけて足を止める。言わずもがな、青葉である。

無視してやってもいいのだがフレンド登録もここで済ませておけば後々楽なので、本当にしかたなく足を止めてやった。

「終わったか」

「ああ、とっととフレンド登録しようぜ」

因みに俺とスズの登録は既に終わっている。二人用チケットはフ

レンド登録済みなのがデフォルトみたいだ。

「わかった」

と、俺と青葉はポケットからカード——の形をしたメモリ——を取り出し、「オープン」と言い放つ。するとカードの表面が一瞬だけ鈍く光り、空中に半透明のホログラムで構成された画面が浮かんだ。その中に記された項目から『Endless Dystopia Online』と表示されているものを選び、ファイル内の『フレンド登録』のアプリケーションを起動する。

「……ん？ 鈴音さんは登録しないのか？」

「……別に、いい」

「スズは……まあ、あれだ……色々合つて無理だ」

……はあ。まさか、人間不信だから無理とは言えないよな……まだスズの許可貰ってないし。……いや、スズにとっては俺以外の奴らは皆信用出来ないだろうし。……これが本当に心配で結婚とかも大変そうなんだよな……まあ、スズの過去を考えるとしかたがないわけだが、な。

「……？ なんなんだ？」

「気にすんな。つーか察しろ。秘密を探る奴は嫌われるぞ」

「……そうか、そうだな。気にしないでおくよ」

うむ……なんだかんだ言ってもこいつは良い奴なんだ。デリカシイの欠片も持っていないような奴だけだな。

そんなこんなでフレンド登録を終了し、青葉と別れて部屋へと戻る。まだ時間は17時にはなっていないので、ダイブまでには時間が余っている。

と、いうわけで……キャラクターを設定しましょう！

種族や職種、HNに初期装備を設定しなければゲームを始めることは出来ない。ゲーム開始直後にも決められるらしいが、事前に設定しておいた方が早くゲームを始められることが出来る。

身体設定も根本的な部分まではいじることが出来ないが、髪や瞳、肌の色ならば変えることが出来る。そのまんまの黒髪黒眼でも良いらしいがリアル割れが酷くなり過ぎるみたいだ。髪や目、肌の色を変えるだけの付け焼き刃のカモフラージュでも、実はそこまでバレ安くないらしい。

そういうわけで、現在俺とスズはカードオープンの項目から『キャラクター設定』のアプリケーションを選び、設定を開始したのであった。

因みに最初は外見設定から決めることとなっているため、スズと恋人のように隣合って壁に寄り掛かり、床に座りながら外見を決めていた。

「……なんだかなあ。自分のことだから、どれをどうすれば丁度良いとかよくわかんないんだよなあ」

呟きながら、ホログラムに浮かぶデフォルトそのままの自分を確認してみる。外出もよくするというのにスズと同じように全く色落ちしていない真っ黒の、普通な長さの髪。顔立ちも若干童顔気味なのだが、そこはスズ程ではない。

……義理なのに、スズとは結構顔立ち似てるんだよな。……あ、

そうか。俺、結構女顔だったのか。目立つ程でもないみたいだけど。

「にいいなら、なんでも似合う」

「そうか？」

「うん」

「……ありがと。でもスズだってそうじゃないか？　きっとスズだってどんな風にしても似合う。そう、絶対に！」

素でこんなに可愛いのだからなんでも似合うに決まっている。馬鹿にする奴とか居たらそいつはこの世から消す。

「お世辞でも、嬉しい」

「そんなじゃないって。スズは本当に可愛いから」

「……あり、がと……でも、にいにみたいには……」

「いや、違う。そんなんじゃない駄目なんだ。そこだけは譲れないんだ……。」

そう、そこだけは譲れないっ！　絶対！　必ず！　スズにはなんでも似合うんだっ！！

たとえスズが反論してきたとしてもこれは譲れない。

スズ可愛い。スズ最高。スズマジ天使。スズLove。俺がスズを否定するなんてこと有ってはいけないんだ……！

「……そう、かな」

「ああ！」

「………そう」

そう言った切り、スズは顔を逸らして俯いてしまう。耳が赤く、照れて恥ずかったみたいだ。

そんな光景を微笑ましく眺めながら、スズの頭を優しく撫でる。

スズも喜んでくれているみたいで、俺の方に体重をそのまま預けてくれた。

0 - 3 : 現実と仮想へのプロローグ【?】（後書き）

【??? / ???

HN : ??? LV ???

SEX : 男性

AGE : 16

RACE : ???

Class : ???

Avility : ???

Skill : ???

Equipment : ???

Money : ???G

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1332ba/>

Endless Dystopia Online

2012年1月3日19時51分発行